

日本人英語学習者のための音韻に関する LFC (2)

Phonological LFC for Japanese learners of English (2)

今仲昌宏 (人文学部国際言語文化学科)

Masahiro IMANAKA (Department of International Studies in Language and Culture)

(承前) (注1)

7. 対照分析の功罪

ELT (English Language Teaching)では、目標言語である英語と学習者の第一言語について、対照言語学における対照分析(contrastive analysis)の手法を用いることによって、彼我の違いを明らかにし、これを発音指導・学習に生かすということが広く行なわれてきた。その際、NS 標準モデルを基準にして、言語間の相違について様々な観点から L1 と比較・対照する形式を取る。対照分析は、両者の基本的な相違を明らかにするという点では優れた方法論であり、比較言語研究には大いに貢献してきたとあってよい。こうした経緯から、対象となる ENL(English as a Native Language)モデルがそのまま英語教育でも用いられるという伝統が継承されてきた。

今日のように、英語が世界の共通語の位置を占めるに至らなければ、学習者の L1 と対等の位置づけによって、他の外国語と同様に NS モデルを学習目標に据えても、問題は生じなかったと考えられる。しかし英語の国際化によって、NS を圧倒する NNS の人口増加により、これを軽視できない状況となった。このため新たな基準の設定に向けて、NNS の L1 の特性を十分に考慮に入れ、その発音の一部を積極的に取り込みながら、効率よく且つ理解しやすい発音習得を目指す方法論が求められるに至った。従って、対照分析から得られた知見、特に NS モデルに対しては一旦距離を置き、新規モデルについて考察する必要性が生じてきた。この新たな状況の現出によって、いわゆる「外国訛り(foreign accent)」のある NNS 英語を肯定的に受け入れざるを得ない仕儀となり、これまでしばしば言及されてきた「NS に一段劣る英語」の全面的な払拭が迫られている。その意味で「訛り」と「了解性、理解しやすさ(intelligibility)」とは別個に考えるべきである。すなわち訛りは NNS のアイデンティティと不可分の関係を示す貴重な特徴なのである。NNS は自己の訛りに対して誇りをもつことが肝要であり、訛りを抑制して NS モデルへ近接することが善だとする思い込みを正し、学習者本人が望まない限り目標とする必要はないことを一般化させるべきであろう(Walker 2010: 99-100)。

8. 綴り字発音の有効性

英語の語彙には、綴り字と発音が乖離する事例や黙字(silent)が数多く存在することは、英語史における言語接触からよく知られる事実であるが、NNS がこうした点に十分対応できるよ

うになるまでにはかなりの学習量が必要である。こうした知識が不足する場合、必然的に綴りを頼りにせざるを得なくなり、いわゆる綴り字発音(spelling pronunciation)を用いることになる。例えば、NNS 発音に比較的多く見られる事例の一つとして、(1)の正統的発音は(1a)であるが、綴り字通りに発音すれば(1b)のようになる。(1b)は NS からすれば誤発音だが、この発音によって逆に綴り字が想起しやすくなり、NS、NNS どちらにとっても誤認される可能性はむしろ低くなるわけである。従って、コミュニケーションを最優先するならば、必ずしも綴り字と乖離した正しい NS 発音を身に付けなくともよく、積極的に綴り字発音を奨励してよいであろう(注2)。

(1) spinach (1a) /'spɪnɪtʃ, -ɪdʒ/ (1b) ['spɪnətʃ]

同様に語によって下記の例のように複数の発音が存在し、選択可能な場合は了解性の点から、綴り字により忠実な(a)の音形が推奨される。

(2) forehead (a) ['fɔːrhed] (b) ['fɒrɪd]

(3) often (a) ['ɒftən] (b) ['ɒfən]

(4) schedule (a) ['skedʒuːl] (b) ['ʃedʒuːl]

9. 子音

9.1 子音連続

従来、英語子音連続(consonant cluster)の調音に際し、NNS 発音の了解性の問題に抵触する誤りの典型例は、大きく分けて二つのパターンがあるとされてきた。学習者の L1 の音韻体系という原因による(5)子音間への母音挿入、(6)子音の一部削除、の二つの転移(transfer)による例(Jenkins 2000: 142)である。

(5) product /'prɒdʌkt/ → [pʊ'rodakʊto]

(6) product /'prɒdʌkt/ → ['pɒdʌk]

(5)は日本語話者の発音に頻発する例である。日本語には基本的に子音連続が存在せず、最小音韻単位である拍[(C)V]の転移という原因からくるものである。連続する子音の間に母音が挿入され、余剰性(redundancy)が高くなる現象で、母音(注3)の増加によって音韻情報が過剰となる。しかし連続子音自体は分割されはするものの、省略されるわけではないので識別上大きな妨げには至らない(Jenkins 2002: 97)。

一方、(6)は中国語を L1 とする話者の発音に多く見られる例である。下線部のように語頭の子音群中の/r/や語末/t/の脱落(elision)が生じ、識別を困難にするが、二つの脱落現象には相違がある。まず語末の子音/t/は、NS 発音でも呼気圧の低下の理由等により、しばしば弱体化しは無破裂になる傾向がある。もともと英語のように、子音連続が数多く生じる音韻構造をもつ

言語の調音過程では、その一部が必然的に弱化ないしは脱落に至ることが多い。加えて、調音器官の可動・非可動範囲がもたらす構造的制約などによる弱化・脱落は、あらゆる話者に共通する調音器官の構造ならびに調音現象に根差すものであり、ある種の普遍性があることから理解上特に大きな障害とはなっていない。

これに対して、語頭の /r/ は、語の識別に関して極めて重要な要素であり、識別の根幹に関わっている。このような NNS の L1 音韻体系に端を発する、いわゆる偶発的な要因による削除は聞き手の了解性に著しい影響をもたらす。つまり(6)の /r/ の脱落は語の識別に必要な語頭の子音音素情報が明らかに欠けてしまうために、より問題が大きいのである。従って、(5)のような母音挿入は私たちが考えているほどには、コミュニケーション上大きな障害にはなっていないということを認識しておくべきであろう。

9.2 閉鎖音

英語の閉鎖音には調音点（両唇、歯茎、軟口蓋）別に、無声—有聲の三つの組み合わせによる /p-b/, /t-d/, /k-g/ の計 6 子音がある。いずれも日本語に存在する音であり、基本的な調音上の問題はない。しかし下線を付した三つの無声音について、日本人学習者は日本語と同様の要領で発音する傾向がある。(C)V を最少構成単位とする、拍の中での子音調音であるために、平均的に破裂の度合いがかなり低いものになっている。そのため、英語閉鎖音特有の語頭ならびに強音節前での帯気音(aspiration)が十分でないことに加えて、VOI(voice onset time)のタイミングが英語よりも若干早いこともあって、有声音と識別される傾向が指摘されている。この調音については強勢の学習と連携させた指導が必要である。

9.3 二母音間の /t/

GA 特有の発音の一つに二母音間の /t/ の有聲化(vocalization)がある。これは二つの母音または有聲子音の間に /t/ が生じる場合、無声音 /t/ の位置で声帯振動が停止せず、振動が継続することで、(7) の例の下線部のようになる例である。これは /t/ の異音の一種で、有聲化により閉鎖音から打音(tap)または単顫動音(flap)に変化する(注4)。現在 GA は日本の検定教科書に付属する音声録音のほとんどで採用されていることや米語文化の影響力の大きさから、多くの学習者に RP よりも GA が基本的発音モデルとして受け入れられており、これを目標とする学習者が多い。しかし音韻上の了解性や調音の容易さからすれば、RP のように完全に無声化した [t] の方が明らかに優れており、これを優先する方が望ましい。ELF の学習モデルの設定にあたって、NS モデルの特定の変種の音素目録 (GA、RP など) の一貫性を重視する必要はなく、7 節で述べたように、あくまで識別・調音のしやすさの観点から、複数の変種の中より取捨選択した分節音で、いわばパッチワークの目録を構成する方が合理的である。

(7) butter ['bʌt̩ər], matter ['mæt̩ər], cutter ['kʌt̩ər]

9.4 側音

英語音素/l/には、相補分布(complementary distribution)をなす2種類の異音があり、それぞれ明るい/l/ (clear /l/)、暗い/l/ (dark /l/)と称する。前者は語頭、母音前に生じ、9.1節で述べたように、語の識別上重要な役割があるので、変化が生じることは考えにくい。一方、後者は語末、子音前に生じ、[ɫ]と異音表記される。現在英語圏では舌端が上歯茎に接触せずに[u]のような母音に近い発音をする(暗い/l/の母音化現象)人口が増加しつつある(今仲 2013)。基本的に暗い/l/は、音節末ないしは語末で生じるため、調音の簡略化(simplification)の一現象とも考えられ、NS 発音全体としてこの発音人口がさらに拡大する可能性がある。こうした理由を背景に、明瞭性の点から後者については母音化した/l/([u])よりは、子音としての/l/に近い発音の方が望ましい。つまり NS らしい暗い/l/よりも、外国訛りがあったとしても子音に近く聞こえる方が、両者にとってよりわかりやすい発音だといってよい。

9.5 /r/

この音素は、日本人学習者の子音調音上の困難点の一つとしてよく取り上げられるが、ELF の立場からいえば、必ずしもそうとはいえない。確かに GA、RP の正確な発音を目標とすれば、達成が困難になる傾向があるかもしれない。しかし内円圏で使われている/r/の変種の多様性に着目すると、実際に NS 間で使用されている様々な方言・変種の/r/には、異音上の違いが幅広く存在している。つまり内円圏での異音間に大きな相違があるにもかかわらず、/r/の了解性が損なわれることはほとんどないのである。従って、NNS が皆揃って標準的な NS の/r/を習得する必然性はなく、NS の異音の中で、各 NNS の L1 に最も近い異音を用いればよいのである。

ENL の一変種であるスコットランド方言では一般的に打音 [ɾ] を用いるが、アラビア語、ポーランド語、ロシア語、スペイン語、北ドイツ方言を L1 とする NNS もこれに近い発音を用いる傾向が指摘されている(Walker 2010: 32)。また NNS の中でも少数派ではあるが、フランス語、南ドイツ方言話者は軟口蓋音[ʁ]を用いる。

さらに GA では音素としてではなく、母音+r の位置でも[r]を発音するが、この位置の r の発音は任意であるために、r 音変種(rhotic)の GA では[r]、非 r 音変種(non-rhotic)である RP では[ø]となるなど、変種によって r が顕在化する場合とそうでない場合がある。上記の NNS 発音などでこの r が発音される場合には、いわゆる綴り字発音となるので、結果的に聞き手にとっては綴り字が想起しやすくなる。これも8節で述べたように、やはり余剰性の高まりによって了解性が向上する例である。

このようにいずれの r も、NS の変種が複数存在することから、日本語的な発音であったとしても識別上特に不利になるということはない。少なくとも/l/ - /r/が同音にさえならなければ GA、RP などの/r/の習得にこだわる必要はない。

9.6 /θ/ - /ð/

歯（間）摩擦音の/θ/ - /ð/は英語固有の音であり、他の主要言語中には存在しない音素である。そのため、日本人学習者に限らず、L1でこの音をもたない多くのNNSがそれぞれ/θ/→[s]、/ð/→[z]で代用する傾向がある。従って、NS側もこの代用音には慣れており、[s] - [z]で発音しても識別上全く問題はない(Jenkins 2002: 88)。例えば、(8)の例は日本人学習者に多く見られる発音である。下線部の第1音節の母音/æ/→/a:/とこれに続く/θ/→/s/も代用音である。bath place と解釈可能な文脈では、本来のbirthplaceとは異なる語として識別されてしまう可能性はあるが、こうした特殊なケースを除けば、/θ/を[s]と発音しても、['bæ:sples]のように第1音節の母音が開口母音の[æ, a:]ではなく、下線部のように閉口母音で発音すれば識別上問題はないことが確認されている。

(8) birthplace /'bæ:θpleis/ → [bæ:sples]

10. 母音

いかなる言語においても、方言・変種差は子音よりも母音に現れるといわれる。英語も同様だが、三つの輪で分類されているように、他の言語に比べて発音上の分枝度が高いため、母音の音色の振れ幅がかなり大きく、変種によって様々な具現形が存在する。従って子音に比して、フォルマントで示される母音のコア範囲（音質）は広くなる傾向があり、その限定が難しくなる。Jenner (1989) は音長(quantity)面と音質(quality)面から、英語母音の特徴を分析した結果、音長をより重要とする見解を示している。日本語は、アラビア語やドイツ語と同様に、母音長の差が意味の相違に影響する言語であるため、英語母音の調音に際しても、長短の違いを表出しやすいことから問題は少ない。これに対し中国語、ギリシャ語、ロシア語では母音長が一定であるために、調音上の困難点になっている。

10.1 /ɪ/ - /i:/

ELTでは、この最小対立(minimal pair)について、従来からNS標準発音を基準として、長さだけでなく、舌面の弛緩(lax): /ɪ/ - 緊張(tense): /i:/の差による音色の違いも含めた発音指導がなされてきた。しかし他の多くの言語においては、この対立のように音素レベルで音長と音色の違いという、二つの示差的特徴(distinctive feature)が組み合わされるケースは非常に珍しい。日本人も多くのNNSと同様に、弛緩母音/ɪ/の調音に困難を感じるため、緊張母音の/i:/ - /i:/という母音長の差のみで調音する傾向があるが、NSはこの違いで十分識別可能であることがわかっている。

10.2 /ə:/ - /ɑ:/, /ɑ:/

日本語の母音数は単母音の五つであることから、母音調音に関する日本人学習者の困難点の一つは音色の多様性が大きく不足することである。すなわち単母音、二重母音をあわせて 20 以上もある NS 標準発音すべてに対応することは困難である。しかし NNS が最低限必要とする LFC のレベルならば、比較的対応が容易である。特に中中央母音(mid-central vowel)の/ə:/が発音できれば、了解性における最小限の母音種の確保が可能になる。これは(8)の例とも関連するが、母音の開口度の違いによって、別の語と識別されてしまう可能性が高いために、最小限の学習目標として参考にすべき点である(Jenkins 2007:46)。

10.3 余剰性の高い音形

8 節で言及した点と関連するが、母音についても選択可能な複数の発音がある場合、余剰性の高い音形を指導する方が NNS の用いる発音としては了解性の点で優れているといえる。(9)-(11)の下線部の比較により、やはりいずれも(a)の音形が推奨される。

- | | | |
|--------------|-----------------|----------------|
| (9) either | (a) [aɪðər] | (b) [i:ðər] |
| (10) finance | (a) [fʌnæns] | (b) [fɪn'æns] |
| (11) privacy | (a) [ˈpraɪvəsi] | (b) [ˈprɪvəsi] |

11. 意味群と核強勢配置

長い発話が円滑に伝わるようにするには、語群(word group)ないしは意味群(sense group)の区切りをどこに置いて発音するか、さらに、各語群中のどの語、どの音節を際立たせて、核強勢配置(nuclear stress placement)ができるかが重要となる。これは統語論、意味論にも深く関わる重要な点を含んでいる。従って、場面や文脈に応じた強勢の移動を臨機応変にできるようにするには、学習手順を正しく踏むことが必要となってくる(Walker 2010: 36-37)。これは音韻部門の一定の基本的学習が終了した段階での導入・指導が効果的である。加えて、実際のコミュニケーション場面で試行錯誤しながら身に付けてゆくことが至当であろう。

12. 受容的能力と生産的能力の分離

ELTでは、あまり重視されることのなかった点の一つである。NNSが必要とする技能レベルの養成に関して、(c)受容的能力(receptive competence) と(d)生産的能力(productive competence)に分けて、習得内容やレベルを能力ごとに別々に仕分けして目標設定をするということである。す

なわち学習者別に最終的な到達目標の設定を、二つの能力については別個に検討し、それぞれの到達項目ごとにレベル上、不揃いな部分が生じて問題とはしないということである。

例えば学習者がコミュニケーションの対象者として、NNSのみを想定する場合、まず当然ながら(c)、(d)はともにNSを基準にする必要はなく、従来の目標の大胆な変更や組み替えをするのである。さらに、L1が異なる学習者同士と特定のL1を共有するNNS同士のコミュニケーションとでは、必然的に異なる目標設定が求められることになる。

一方、NSとのコミュニケーションを視野に入れる場合は、(c)はNSに近いレベルを考慮に入れねばならない。NSの発話を受容するには、常速等への対応も含めて内円圏の英語の音声特徴を学習・実体験しておくことが望まれる。語彙や文法についても同様である。次節で触れる、連結発話などの項目は特にハードルが高くなるが、こうした点も学習内容に含めるかどうかの判断が求められることになる(Walker 2010:42-43)。(d)の習得にあたっては、(c)よりもはるかに多くの学習量が必要となるので、基本的にはNNSを対話者とする場合と同様で差し支えないが、学習者自身の要望によって様々なレベル設定があり得るだろう。

13. 連結発話

ELTでは、連結発話(connected speech)はNS発音の主要特徴の一つとして、ENL習得上重要な項目に挙げられている。NSの常速発音では、分節音同士の連結度が高いため、同化や音の収縮等が頻繁に生じる。前節で述べたように、ELFでは(c)、(d)の養成について、明確に分けて指導するという考え方からすると、NS-NNS間では、(c)の受容面については最低限連結発話に慣れておかねばならないが、少なくとも(d)に関しては、膨大な学習上の負担を考えれば、自分のペースでゆっくり話せばよいわけで、基本的に連結発話を目標に据える必要はない。一方、NNS間では、やはりいずれの能力の養成にもこの連結発話を含める必要はないことになる。

14. NS標準モデルの問題点

NS標準モデルを学習目標とする場合、最大ともいえる問題は、大半のNNSにとってはそのハードルが高すぎることである。これへの対応策としては、主に2点挙げられよう。第一に、ELFの立場からは、発音に限らず、優先順位が低いと考えられる学習項目については、思い切って省いて指導することが考えられる。例えば三人称単数現在の-sはコミュニケーション上、付け忘れても内容理解には全く影響がないにもかかわらず、従来から間違いとして指摘されてきた。単にNSの語法に沿っていないという理由だけで、瑣末的な誤りを教師が繰り返し指摘すると、学習者はある種の罪悪感を抱かざるを得なくなる。この例のように発信面では、コミュニケーションを最優先すれば、すべてのNS基準を順守する必要はなくなるのである(注5)。

第二に、理想(NS標準モデル)と現実(自分の英語)との乖離が大きいことが、学習者の劣等感に繋がって、音声によるコミュニケーションに積極的に参加できなくなる一要因になるという点である。発信に際しては、ELFのNNS独自のモデル(注6)を自己の目標とし、これを

肯定的に受け入れられる環境をつくることである。World Englishes の理念に依拠すれば、拡大圏の英語モデルは、内円圏の GA、RP も含めて学習者が数ある変種の中から自己のニーズに合わせて選択できるようにすることが望ましい (Baumgardner 2009; Jenkins 2007: 36)。

音声指導の際には、リスニングなどでも GA、RP がモデルとされてきたために、ELT では内円圏のごく狭い範囲の変種に照準を合わせた聴解訓練が実施されてきた。従って、多くの学習者は NS の多様な方言・変種も含めて、異音の幅広い領域をもつ NNS 英語の多様性に慣れていない。そのために、NS 標準発音以外の方言や未知の L1 をもつ NNS と対峙した際には、NS 標準とのギャップが大きく、訛りの聴取に大変苦勞することになる。学習者の受容能力の養成については、様々な NNS の変種等に慣れておくことの方がはるかに重要であり、インターネットなどを活用して広範囲にわたる変種の音声教材を事前に用意し、慣れさせておくことが望ましい。

また、見逃されがちな点の一つに、学習過程の中に英語文化が入り込んでいることから生じる、行動規範に関するある種の刷り込みの問題がある (注 7)。内円圏のコミュニケーションは、基本的に話し手に負担のかかる型 (Yamada 1997) であり、多弁であらゆることを論理的に整然と説明できることが高く評価される傾向がある。一方、日本人も近代化 (西洋化) に伴って、こうした影響を少しずつ受けてきていることは確かであるが、今でも「多くを語らない」文化、聞き手に負担のかかるコミュニケーション型である、などといわれることが多い。このような状況下で、NS 教員は NNS 学習者に対して、英語文化のコミュニケーション型を強要しているという問題点が指摘されている (Jenkins 2007: 52)。

15. 序列と差別

英語に限らず、言語には必ずある種の序列が生じるものである。例えば、フランス語ではパリで使用される変種が社会的に最も高い価値があるとされ、順にプロヴァンス地方、ブルターニュ地方、アルザス地方というように、変種の階層性が指摘されている (Paltridge and Giles 1984)。NNS 英語においてさえも、同様の序列の存在が認められる。スペイン語訛りの英語とスウェーデン人の話す英語では、後者の方が標準に近いとみなされるのである (Ryan et al. 1977)。これは NS 標準発音に基づいた序列化であるのは明白である。

発音は数ある言語的特徴の中でも、話者のアイデンティティに直に関わる点であるとともに、対話者に対する訴求力が最も高いものの一つである。そのため NS の音声的特徴からの逸脱が大きいほど、しばしば差別の対象となる。とりわけ内円圏では、NNS は訛りが少ない方が差別を受ける確率が確実に低くなることが指摘されている (Lippi-Green 2012)。当然のことながら、通常 NNS は文法、語彙など、様々な点で NS の基準に満たない英語を使用するために、NNS の発音は NS によるからかいかや差別の対象になることが頻繁にある。

16. 評価方法

発音の評価についても、これまでと同様に NS 標準モデルに基づいた評価方法が長く踏襲されてきたが、1980 年前後を境に変化が生じ始めている(Mufwene 1997, 2001)。以前は子母音、語強勢等の音韻の基本的単位が正確に発音できることを主な学習目標とするとともに、その習得の成否を基準に評価される傾向があった。総じて学習者が NS 発音の土台ともいえるべき最小の分節音単位から学習を開始した場合、マイクロ単位の発音に気を配らねばならなくなり、最終的な目標である文レベルのコミュニケーションへの道筋がなかなかみえてこないという問題がある。外国語学習において、一旦 NS モデルに近い発音を目標としてしまうと、基本的音韻単位の養成に相当な時間がかかることになり、多くの学習者が途中で挫折してしまうことになる。これは学習の初期段階からコミュニケーション優先の学習方法を中心とした教育を実践する、という観点からいえば好ましいとはいえない。日本人は人前で話したがらないという傾向があるといわれるが、この問題が少々誤り（としておくが）を気にせずに、学習者が自由に発話することへの大きな阻害要因となることは否定できない。小さな発音単位にこだわれば発音だけでなく、その先にあるコミュニケーションへ自体への意欲をも失わせてしまうという、いわば「角を矯めて牛を殺す」結果となることは明らかである。

学習者が各分節音について、NS に近い発音ができることと発話全体を通じてのわかりやすさとの相関性は低いという研究もある(Porter et al. 1989a)。発音の了解性は話者本人ばかりでなく、聞き手側にも深く関わるので、これまでのように話者側の問題のみを取り上げるだけでは NNS に対して公平さを欠いているといわざるを得ない(Kenworthy 1987: 14)。細部に必要以上にこだわりすぎることなく、話者 - 聞き手のバランスをどのように取って指導・評価するかが肝要であろう (注8)。

外国語の学習過程では、小さな間違いが数多く生じるのは当然である。最終的な目標が文単位のコミュニケーションであるならば、評価は小さな問題があっても発話全体として聞き手が理解できるかどうかを優先しなくてはならない。こうした流れは CLT (communicative language teaching) が登場した頃から見直されるようになり、ELF においてはこれまで当然とされてきた評価の優先順位の大幅な入れ替えや見直しがなされつつある(Morrow 1979: 149)。

17. ELT 産業

拡大圏の英語教育界では、長い間 GA、RP が基本的学習モデルとして位置づけられてきたために、教材もほとんどがこれに準拠して作成されてきており、この体制を変えるのは容易ではない。まずは ELF の正当性が受け入れられる環境を醸成しない限り、今後もこのモデルが継承されてゆくことは間違いない(Jenkins 2007: 44)。Kachru (1997b)によると、拡大圏の学習者に対して、NS 標準モデルを間接的に強いる要因の一つに ELT 産業の存在があるという。長年にわたって辞書、教科書、教授法、検定試験制度 (注9)、教員養成に関する専門的知識・技術などを継続して拡大圏に供給し、ENL を世界の津々浦々に普及させ、英語圏の一大産業にまで発展してきたのである。

この業界が大きな圧力となって、あらゆる方面に影響力を行使し、いわばELFを不完全な英語と決めつけて、意図的に低く評価することによって、拡大圏の学習者をNSモデルに繋ぎとめている。このようにNSモデルを基準とする環境が世界的に整っているため、これと等価で交換可能なNNSモデルを打ち出すことには大きな困難が伴うといえる。こうした環境は、NNS自身が自己の発音を卑下するという、英語コンプレックスを生む英語帝国主義とも密接な関係がある。拡張圏の学習者の耳がNS標準に慣らされ、刷り込まれた状態になっているともいえる。

18. これからの ELF

ELFについて、今後検討すべき課題を2点掲げる。

- (1) 拡張圏のモデルは、(a)NNSが共有可能な一般的基準と(b)個別言語ごとの基準の二通りが想定できる。いずれも検討すべき対象の範囲は広く、前例がないこともあり、モデルの核となる要素の集約・確定が内円圏や外円圏のように簡単ではない。
- (2) 拡張圏のNNSの習熟度には大きな隔りがある。

様々な言語的背景をもつ拡張圏の学習途上のNNSすべてが記述の対象となるために、基本となるLFCの設定にあたっては、様々なL1やレベル差などを考慮に入れなければならない、記述の集約には大きな困難が伴うことが予想される。

内・外円圏では英語が日常的に使用される社会や共同体が存在し、NSレベルの運用能力をもつ話者が多数派を占めている。一方、拡張圏ではそうした大きな言語集団が存在しないだけでなく、構成員のほとんどが外国語としての英語の学習者である。また、書記言語よりは音声言語でのコミュニケーションがNNSの言語活動の中心と想定され、対話者同士の共同作業がコミュニケーションの成立に重要な役割を果たすことになる(Seidlhofer 2008: 65)。つまり対話するNNS同士には、大きく異なる言語背景や情報格差(information gap)がある場合や言い誤りなどが頻繁に生じたりする可能性があるため、言葉のやり取りの中で互いに相手が意図するメッセージを推論しつつ、意向などを探ったり、提案・補完したりし合いながら理解を深めてゆくという、ELTでは求められていない技能の養成が、特に重要であることもLFCの明確化に苦勞する点である。

19. 新語法の定着

これまで日本語的発音を含むNNSの変則的発音とされてきたものは、メッセージの伝達上問題がないのであれば、必ずしも誤りとは判断できないのではないか。逆の見方からすれば、新規形の導入(innovation)と見ることも可能である。すなわち外円圏のいわゆるNew Englishesに続く、拡大圏の新たな英語の勃興と捉え、国際コミュニケーションにとってはむしろ意義のある変化だとも考えられるのである。ELFでは学習者のL1とENLとの言語接触によって生じた、

言語変化の一部として肯定的に評価する、というこれまでとは逆転した見解を取る。つまり、こうした変化は NS にとっても徐々に変化を受容せざるを得ない段階に入ったということになる。

今後、NNS の学習目標として、ELF が国際的な基準で一定の評価が得られる段階に達しているかどうかの試金石は、ELF 内で生じる新しい語法等の定着度が一つの尺度と考えられる (Bangbose 1998)。NNS によって新語法等が使われるようになり、それが内円・外円・拡張圏全体への一般化に向かうかどうか、さらに、将来的に ELT 産業から出版される辞書等にも掲載されるか否かなど、今後の成り行きが注目される。言語変化は、基本的に言語集団内の多数派が新しい発音や語法を頻用することで生じるものであり、仮に権威をもった少数派(NS)が異を唱えても、変化を完全に押しとどめることは難しい。NNS の多数派が新しい英語の言語変化の潮流を起し、それがいずれ定着するようになる可能性は徐々に高まると考えられる (注10)。

20. おわりに

EIL の概念が日本の英語教育にも徐々に浸透してきており、かつて ENL に収斂していた教科書の題材やイデオロギーなど、一部の問題は改善されつつあるように思われる。しかし発音モデルを始めとして、学習目標、学習者の意識などといった点に関しては、ELT の影響が長く続いてきたためか、未だ手付かずの状態に近く、多様化に向かっているとはいえない状況である。本稿では、その契機として、ELT ではあまり重視されることのなかった NS 側 (聞き手) が識別可能な範囲を検討しながら、日本人学習者のための LFC の試行的発音モデル (個別言語基準) について考察を行なった。同時に、これと包含関係にある、現在様々な形で検討されている拡大圏の学習者が目指す一般モデル (NNS が共有可能な一般的基準) についても検討した。さらに、将来的に学習者の要望に沿って、学習目標やレベルを個別・具体的に設定・学習可能となるような仕組みに改善できれば、より学習意欲を高めることにもつながるであろう。

注)

- 1) 今仲昌宏 (2018) 「日本人英語学習者のための音韻に関する LFC (1)」 『東京成徳大学教職課程年報』 創刊号、pp. 4-10.
- 2) 日本語における音訓等の漢字の「読み」の多様性が原因による誤読と共通する事例である。例えば「大佛次郎」の呼称は、正しくは「おさらぎじろう」だが、これを知らない人が姓を「だいぶつ」と読んだ場合の方が、逆説的ではあるが却って漢字を想起しやすく、音声によるコミュニケーションにおいては有効だといえる。
- 3) 日本語の拍のように、CV|CV|CV... という、子母音が交互に生じる構造は言語学的に普遍性の高い音節構造といわれている。子音の後に挿入される母音は、日本語からの転移現象であり、基本的に英語の強形-弱形の間位置する母音であることが多い。母音が挿入されることによって、英語本来の音節構造を変えることにはなるが、明瞭度を大きく下げないわけではない。

- 4) これ以外にも GA の常速時の収縮により、center ['senə]などのように/t/の破裂が失われるだけでなく、打音としても聞こえなくなる例もある。
- 5) be 動詞(am, are, is + not)ならびに have 動詞(has, have + not [完了形])を包含する、否定の短縮形である ain't は、NS の無学な(educated)人が使用する語や社会方言などとされているが、実際には教育のある(educated)人でも口語で使うことがある。それは正しい動詞の活用がなされずとも、メッセージの理解の妨げにはならないという理由が根底にあるのではないかと考えられる。英語史における、屈折の消失という歴史的経緯があり、こうした語形変化はさらに廃れてゆく途上にあるのかもしれない。従って、ELF で生じつつある変化は、言語学的にみて合理的な変化の過程と捉えるべきものかもしれない、NS 基準に合致しないということだけで、すべてを誤りだとすることには、合理的理由がない点も数多く存在する(Cogo and Dewey 2006; Dewey 2007)。
- 6) NNS の語彙の学習において、いわゆるイディオムは教室での指導に適しているとはいえない。NS を対話者として想定しないのであれば、ENL の細部にわたる習熟は不要となるからである。つまり NNS 同士のコミュニケーションにおいて、NS 英語の深い知識や高い技能が互いに共有されていない状況下では、こうした点が逆に阻害要因となる場合もある。NS を対象とする場合にのみ、ENL の網羅的な学習、深い知識、英語圏内で長期間英語に曝される経験などが必要となるからである。イディオムは内円圏で生活する場合に限り、NS との長期間に及ぶ生活体験などを通じて徐々に身に付けてゆけばよいものであり、ELF では重視する必要はない(Seidlhofer & Widdowson 2009: 31)。
- 7) 英語文化の中には、クリスマスやハロウィーンといったキリスト教の行事が商業主義と一体化し、英語教育にとどまらず、日本社会の中に深く入り込んでしまっており、多くの人がこうした点に無感覚になっている状況がある。
- 8) Walker (2010: 148-157)は、導入の段階で各学習者の分節音等の発音が、どのレベルにあるかを見るために、細部を診断するテスト(diagnostic testing)を実施して指導の参考にするとしている。その後、セクションごとに到達度を測るテスト(achievement testing)、課程修了時には統合的な熟達度テスト(proficiency testing)の実施が望ましく、また、どのような観点から熟達度を測るかという点に関しては、(1)核強勢配置の使用、(2)子音調音、(3)子音群の扱い方、などを提案している。
- 9) TOEIC のリスニングセクションは、現在 GA、RP に加えてオーストラリア英語の発音等も取り入れることで英語の多様性を謳っているようである。しかし内円圏の英語変種だけに留まっているという意味では、ELF の立場を容認してはいない。つまるところ、英語圏の主要国の NS 発音を取り入れるだけではこれまでの方針と大きな違いはなく、外円圏、拡大圏の多様性を考慮しているとはいえない。
- 10) 具体的には、可算/不可算名詞の区別や誤り、冠詞の不整合の問題、前置詞の誤選択の問題など、いわゆる機能語の誤用などは、言語内容を理解する上では大きな問題とはならないことが多いため、変化の兆しが数多く指摘されている(Seidlhofer & Widdowson 2009)。

参考文献

- Bamgbose, A. (1998) 'Torn between the norms: innovations in World Englishes'. *World Englishes* 17/1: 1-14.
- Baumgardner, R. J. (2009) 'Teaching World Englishes'. In Kachru, B. B., Kachru, Y. and Nelson, C. L. (2009) 661-679.
- Bex, T. and Watts, R. J. (eds.) (1999) *Standard English: The Widening Debate*. London: Routledge.
- Brumfit, C. J. and Johnson, K. (eds.) (1979) *The Communicative Approach to Language Testing*. Oxford University Press.
- Cogo, A. and Dewey, M. (2006) 'Efficiency in ELF communication: from pragmatic motives to lexicogrammatical innovation'. *Nordic Journal of English Studies* 5(2), 59-93.
- Cummins, J. and Davidson, C. (eds.) (2007) *The International Handbook of English Language Teaching*. Vol. 1. Norwell Mass.: Springer.
- Dewey, M. (2007) 'English as a lingua franca and globalization: an interconnected perspective'. *International Journal of Applied Linguistics* 17/3, 332-354.
- Dziubalska-Kołodziej, K. and Przedlacka, J. (eds.) (2008) *English Pronunciation Models: A Changing Scene*. Bern: Peter Lang AG, International Academic Publishers.
- Jenkins, J. (2000) *The Phonology of English as an International Language*. Oxford University Press.
- Jenkins, J. (2002) 'A sociolinguistically based, empirically researched pronunciation syllabus for English as an International Language'. *Applied Linguistics* 23/1: 83-103.
- Jenkins, J. (2007) *English as a Lingua Franca: Attitude and Identity*. Oxford University Press.
- Jenkins, J. (2009) 'Exploring Attitudes towards English as a Lingua Franca in the East Asian Context'. In Murata, K. and Jenkins, J. (eds.) (2009) 40-56.
- Jenner, B. (1989) 'Teaching pronunciation: the common core'. *Speak Out!* 4: 2-4.
- Kachru, B. B. (1997b) 'World Englishes 2000: resources for research and teaching'. In Smith, L. E. and Forman, (eds.) (1997) 48-67.
- Kachru, B. B., Kachru, Y. and Nelson, C. L. (2009) *The Handbook of World Englishes*. Wiley-Blackwell.
- Kenworthy, J. (1987) *Teaching English Pronunciation*. Harlow: Longman.
- Lippi-Green, R. (2012) *English with an Accent: Language, Ideology, and Discrimination in the United States*. 2nd Edition. Routledge.
- Lowenberg, P. H. (2002) 'Assessing English proficiency in the expanding circle'. *World Englishes* 21/3: 431-435.
- Milroy, L. (1999) 'Standard English and language ideology in Britain and the United States'. In Bex, T. and Watts, R. J. (eds.) (1999) 173-206.
- Morrow, K. E. (eds.) (1979) 'Communicative language testing: revolution or evolution'. In Brumfit, C. J. and Johnson, K. (eds.) (1979) 143-158.

- Mufwene, S. (1997) 'The legitimate and illegitimate offspring of English'. In Smith, L. E. and Forman, M. L. (eds.) (1997) 182-203.
- Mufwene, S. (2001) *The Ecology of Language Revolution*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Murata, K. and Jenkins, J. (eds.) (2009) *Global Englishes in Asian Contexts: Current and Future Debates*. New York: Palgrave Macmillan.
- Paltridge, J. and Giles, H. (1984) 'Attitudes towards speakers of regional accents of French: effects of regionality, age and sex of listeners'. *Linguistische Berichte* 90: 71-85.
- Phillipson, R. (2007) 'English, no longer a foreign language in Europe?' In Cummins, J. and Davidson, C. (eds.) (2007) 123-136.
- Porter, D. and Garvin, S. (1989a) 'The testing of pronunciation – some preliminary questions'. *Speak Out!* 4: 5-7.
- Rubdy, R. and Saraceni, M. (eds.) (2006) *English in the World: Global Rules, Global Roles*. London: Continuum.
- Ryan, E. B., Carranza, M. A. and Moffie, R. W. (1977) 'Reactions to varying degrees of accentedness in the speech of Spanish-English bilinguals'. *Language and Speech* 20: 267-73.
- Seidlhofer, B. (1999) 'Double standards: teacher education in the expanding circle'. *World Englishes* 18/2: 233-45.
- Seidlhofer, B. (2006) 'English as a lingua franca in the expanding circle: What it isn't'. In Rubdy, R. and Saraceni, M. (eds.) (2006) 40-50.
- Seidlhofer, B. (2008) 'Language variation and change: the case of English as a lingua franca'. In Dziubalska-Kolaczyk, K. and Przedlacka, J. (eds.) (2008) 59-75.
- Seidlhofer, B. and Widdowson, H. (2009) 'Accommodation and the idiom principle in English as a lingua franca'. In Murata, K. and Jenkins, J. (eds.) (2009) 26-39.
- Smith, L. E. and Forman, M. L. (eds.) (1997) *World Englishes 2000*. Honolulu, Hawai'i: University of Hawai'i and East-West Center.
- Walker, R. (2010) *Teaching the Pronunciation of English as a Lingua Franca*. Oxford University Press.
- Yamada, H. (1997) *Different Games, Different Rules: Why Americans and Japanese Misunderstand Each Other*. Oxford University Press.
- 今仲昌宏 (2013) 「英語/1/の母音化と音声指導上の問題について」 『東京成徳大学研究紀要』 第20号 95-107.